

MAPPS セミナー 019

博物館資料情報 共有の効果

平成 26 年 9 月

ミュージアムITを導入した館では、どんな課題を解決できたのか。導入しても期待した効果が得られなかったケースでは、何が問題だったのか。こうした現場情報は、後続の館にとって極めて有益となるものだが、見聞きする機会を得るのは難しいのが現状である。

早稲田システム開発では、このような現状を打破するために「ミュージアムインタビュー」を実施している。このたび、ヒアリング館が100館に到達したのを機に、主に「情報共有の効果」について、集まった声をもとに簡単にまとめてみたい。

ミュージアム・インタビューとは

早稲田システム開発の代表がシステム導入館の担当学芸員を訪ね、導入の動機、効果、課題、運用上の苦労話や将来構想などをヒアリングし、インタビュー形式で公開している連載記事。2005年11月に開始し、今年7月に100館に到達。9月現在では102館分の記事を以下のURLに掲載している。

<http://www.waseda.co.jp/voice/interview/>

1. 情報の正確な蓄積と継承(タテの共有)

【ミュージアム・インタビューより】

博物館資料情報の蓄積は自分の世代で完結するのは無理。何世代も引き継いで完成を目指すものです。（公立博物館）

私たち学芸員は「仕事自体がバトンリレー」なんです。資料を整理・管理することに携わっていますが、その資料自体は何百年も前から存在しているわけですね。となると、一人の学芸員の頭の中だけで仕事が終わるはずがありません。（公立博物館）

前任者はデータベースを整えて、情報の継承を円滑にしたいと考えていたようです。（公立博物館）

ミュージアムが日常的に利用する紙の台帳には、特有の使い勝手の良さがある。永年の活用経験から愛着を持つ学芸員も多いが、現代の情報管理水準で見れば非効率的であるだけでなく、管理品質の低下を指摘する声もある。

たとえば一度間違った場所にファイリングしてしまうと二度と発見できない、あるいは付箋紙などを貼り足したり加筆したりした際にどれが正解か後の人が見て分からない……といったトラブルは、すでに多くの館で発生しているのが現状である。ミュージアムITの利用館にデータベースシステム導入の動機を尋ねると、「正確な資料情報を次世代に引き継ぐため」という声が少なからず聞かれるのは、こうした経験あるいは危惧に基づくものと思われる。

紙のカードは、慣れた人であれば手早く情報を探することも可能だが、そこに至るには一定の習熟が要る。ITによる情報管理が日常生活にまで及び、今後も拡大するばかりの現在では、す



でにペーパーレス化は避けようがないところまで来ている情勢であり、誰にでも情報を検索できるデータベースシステムのカタチにしておく方が良いことは言うまでもない。

9年前のインタビュー開始時は、ちょうどいわゆる「ITバブル」が終焉を迎えたとされる時期に一致する。連載期間中は、一般消費者の間にIT端末が行き渡った時期で、政府や自治体の間でも対応の必要性が認知され、さまざまなサービスが生まれた。この間、博物館でも少しずつIT導入が進んできたが、イ

ンタビュー記事を読み返してみると、時が経つにつれて「情報の継承のため」という効果を期待して導入に踏み切ったという声が増えていることがわかる。

情報の継承とは、ミュージアムにとっては第一義にあたる仕事でもある。それは、館の存在意義と日常業務の両面に深く根ざす。現在は未導入の館でも、ミュージアムITの必要性を訴える声は日増しに高まっているため、今後はさらに加速するものと思われる。

2. 情報の相互活用(ヨコの共有)とその効果

【ミュージアム・インタビューより】

詳しく知る職員の退職に備えるために、また合併の相手方の資料を把握するために、データベースは必要だという話になりました。（教育委員会）

合併の相手方の館にあった資料について、問合せにも簡単に対応できるようになりました。（公立博物館）

ひとつの作品データでも、違う役割の人が見ることで、精度を上げていくことができます。システムが「みんなのデータベース」となって、「館内ウィキペディア」みたいなものになりますね。（公立美術館）

システム導入の動機としては、「職員間での正確な情報共有を行いたい」という声もかなり多数にのぼった。

学芸業務は極めて専門性が高いため、「その分野のことは担当者がいないと分からない」という事態に陥りがちである。だが、たいていの館では各分野に複数の学芸員を抱えるような人員配置が取れないことから、来館者からの問い合わせがあった場合は、簡単な質問以外は「即答できない」「後日、担当者が出勤次第回答する」という対応も少なからず存在するのが現実である。

いわゆるグローバル時代の到来によって各業界で顧客サービス上の競争が激化している中で、これでは地域住民の満足は得られない。都心部であれば「在庫品は即日納品」で対応するオンラインストアも珍しくない現代では、明らかに時代遅れ。そんな危機感から、職員の誰もがアクセスでき、情報を検索できるデータベースシステムが必要だった…。ミュージアムインタビューでは、時に、館の置かれた厳しい現状を拝聴することもあった。

データベースシステムがあれば、データさえ整えれば業務効率とサービス品質の両面を向上できる。実際、導入後に館の対応力が飛躍的に高まったという報告は多い。一方で、一時期は「システムに投入するデータが整わない」という声も多数聞かれたが、最近では「一度に登録しようとせず、段階を踏んで拡充すればいい」という館の実体験もあちこちで耳にするようになり、こうした課題は解決へと向かっているように感じる。

また、学芸員の調査研究業務と言えば個人技の色合いが強いが、館共通のマスターデータは複数名が書き足せる仕組みで運用する館も増えている。ある職員が見つけた参考文献が登録されていると、別の職員がそのデータを使ってさらに深く研究を進める、あるいは別の分野での仕事に活かす。パーソナルワークの領域にグループワークの要素を取り入れることができるのも「情報共有」の副産物と言えるだろう。

3. 情報の自己活用

【ミュージアム・インタビューより】

当館は学芸員が一人。訊く人がいません。データベースシステムは「訊ねる相手」なんです。（公立博物館）

受入年代からでも名前からでも、多面的に検索できるので、対応力は高まりました。（公立博物館）

学芸員が1名しかいないという館は、実は珍しくない。こうした館では「情報共有」の仕組みは意味がないように感じるが、ミュージアムITを導入した環境では、意外に「効果を実感している」という声が少なくない。

これは冒頭で触れた「紙の台帳の危険性」のもうひとつの例だが、膨大な資料、膨大な情報を扱う業務が長年続くと、「どこに書いたか」を覚えていられなくなることがある。特にベテラン学芸員は頭の中での情報の仕分けに長けているものだが、10年、20年と続けば忘れる情報も発生し、時には「過去に行った仕事に気付かず、新たにイチからやり直す」ということもある。

データベースシステムの大きな利点は、ハードウェアを含めた環境が壊れない限り、時間経過に関係なく「そこにある」の

を「探せる」点にある。何年前であろうが、何年後であろうが、基本的に同じ操作で検索できるシステムは、業務効率のみならず「思い出す負担」をほぼゼロにまで抑える。

この「自分とは別の記憶」こそが、学芸員1名体制の館が最も実感する導入メリットであるようだ。インタビュー現場では、実際にシステムを指して「もう一人の学芸員のようなもの」と評価した学芸員もいた。これは、私たちの日常で使うPC端末で、誰もが実感していることでもある。言葉には出さなくても、大半の館で体感している利点であるはずだ。

4. 分野を横断する情報共有

【ミュージアム・インタビューより】

自館特有のテーマ（地場産業、伝統工芸）について、分野をまたいで検索できるように、「●●関係資料」というチェックボックス項目を作ったので、それをキーに検索できるようになった。（公立博物館）

「御主人が画家、奥様が文学者」ということもあります。館をまたいだデータ共有までできれば、それにも対応できます。（公立美術館）

前ページで取り上げた館の声の2つ目のケースは、まだ実現できていない。美術館が同じ自治体内の文学館とデータを共有できた場合に発生するであろうメリットで、構想段階の話である。

文学や美術の展示で、原稿や作品の隣に博物館から借りた当時の写真や生活用具などを並べると、鑑賞者は時代性を感覚的にも理解できるようになる。実際に、美人画に描かれた人物が手に持つ手鏡と同時代の実物を展示している場面を見た

ことがあるが、当時の世俗がよりリアルに理解できた。

複数の分野を管理する総合博物館であれば、他館から資料を借りなくても所蔵資料だけでこうした展示の実現は可能だろう。しかし、実際に行おうとなると、それぞれの担当者が自分の分野の目録を持つがゆえに他の分野の情報にはアクセスしづらい状況にあるケースもある。この場合、他の分野にどのような資料があるかを瞬時に把握することはできないため、絵画のモチーフになった民具の存在を知ることも難しいだろう。

このように、館全体で資料情報の共有がなされていないければ、多様な分野の資料を所蔵する総合博物館のポテンシャルを十分に発揮できないこともあるのだ。

一方、前ページの声の1番目のケースは、醤油製造を地場産業に持つ地域の博物館の事例である。醤油に関する資料を抽出する際、「醤油に関する古文書」や「醤油工場の職人の衣服」を「歴史資料」「民俗資料」から探すのは手間がかかる。そこで、全分野に「醤油関係資料」という独自項目を持たせて、分野を横断して検索できる環境を整えたという。

この方法は、たとえば茶所であれば「お茶関係資料」で、明治維新に重要な役割を果たした土地の館であれば「明治維新関係資料」で…というように、分野をまたいでデータを取り出す際に極めて便利だ。この事例を踏まえれば、データベースシステムをより有意義に、より強力に活用する方法を見出すことは可能であるはずだ。

日常的な資料管理、収集、調査研究などの業務は、分野ごとの担当制を敷くことで高い専門性を得ることができる。ミュージアムITでは、登録データを充実させていくことも、この「専門性」の守備範囲内にあたるだろう。

だが、データの活用については、分野ごとに「閉じたもの」にしてしまうのは得策とは言い難い。場合によっては、館のポテンシャルの発揮を阻害することにもなりかねないのだ。

インプットはより深く、より正確な仕事を求める専門家の手に。アウトプットは、その正確な情報の活用範囲を広げるために、万人の手に。これが、現在のところミュージアムITの最も強力なカタチと言えるかもしれない。

ここまで、ミュージアムITの導入を果たした館へのヒアリング内容から、博物館とデータベースシステムのリアルな現状について俯瞰してきた。より詳細かつ体系的な分析は、すでに冊子を発行済みなので、今回は「情報共有の効果」を中心にまとめた。

ITは館に何をもたらすのか、何を変えるのか。その答は現場にしかないと考える。現地を訪問してのヒアリングも100館を超えたので、さらに報告を続けたいと思う。